宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話玄海代⑧1311
定価一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市吉塚二丁目二五番三号（〒八一二）
電話福岡（〇九二）六一五—九四五六番
本社 京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四一—三三四一（代）〜四番
三五一—一三三四・六〇六六番

第十九回中津宮七夕揮毫会
技倆伯仲で再審査

去る七月二十二日、当大社中津宮鎮座の大島で第十九回中津宮七夕揮毫会が予定通り行われた。

同揮毫会には厳正なる予選審査をパスした約五百五十名の小中学生が参加した。

この日は早朝僅かに小雨がばらつき心配されたが、すぐおさまりその後は降りもせず照りもせずで海上も穏やか、涼しい絶好の揮毫コンデイションとなった。

参加者等は朝早くから先生や父兄に引卒されて続々神湊波止場に集合。神湊と大島間の海上約八粁を渡船〃弁天丸〃がフル運転で運航しこれを運ぶ。

大島のメインストリートはこの関係来島者でいっぱい、その熱気がいやがうえにも雰囲気を盛り上げていた。

会場は大島小・中学校。定刻、揮毫開始されるや、豆書道家は同伴の先生や父兄の心配をよそに一生懸命に筆を走らせる。身体中に汗しながら精魂こめた作品は見事な出来ばえ。

作品は中津宮神前に奉納され、午後一時からは恒例のサザエ採りが行われ、参加者と父兄が共に楽しんだ。

一方、審査は中津宮斎館で坂口雅風、城戸筑山両先生によって行われたが、作品は何れも優秀で甲乙つけ難く再審査が行われた程であった。

両先生始め関係者はこの揮毫会が年を追う毎にレベルアップしていることを喜び、今後を期待している。尚、表彰式は午後四時から同宮社頭で行われた。

表彰者氏名

小学生の部

特選

【一年】時政寿（赤間小）、古賀英知（同）【二年】あべまゆみ（玄海小）、木村千秋（赤間小）、【三年】永嶋さとし（赤間小）、荒木智美（津屋崎小）、高畑由美子（赤間小）【四年】秋田恭未子（赤間）、高田修（大隈塾）、高島勉（玄海）【五年】池浦文則（吉武）、前田邦宏（福間）、安井元昭（東郷）【六年】高田和子（福間）、石松和徳（赤間）

準特

【一年】もりたけふみ（赤間）、かわかみみさ（同）吉村幸子（山本塾）【二年】山本れい子（赤間）たねだはるみ（玄海）遠藤恭子（大島）まつおゆみ（赤間）【三年】宮田照代（赤間）中山深（東郷）長瀬健一郎（津屋崎）加藤幸枝（赤間）吉田康政（東郷）【四年】中牟田哲哉（大島）千原博美（河東）政岡依子（赤間）中村博人（大島）日永田正志（吉塚）【五年】中山幸枝（玄海）前野恵（河東）浜ゆう子（津屋崎）吉田浩二（東郷）尾郷淳（福間）【六年】田中千由里（玄海）相部美由紀（東郷）藤井由美（上西郷）松本真誠（玄海）

金賞

【一年】梅田陽（赤間）吉武輝佳（東郷）佐藤文次（大島）中山ゆり（日の里東）【二年】中川みき（赤間）花田明典（玄海）かわしまみき（東郷）松尾美保子（赤間）岡部恭子（同）【三年】金谷理夏（赤間）富永恵実（津屋崎）磯部伴子（玄海）梅田圭（赤間）七田恵理子（玄海）【四年】中村由佳（赤間）阿部理恵（同）本村浩志（同）下司なぎさ（玄海）田中美穂（河東）蒋田浩之（上西郷）【五年】金丸清彦（東郷）本村泉（大隈塾）神谷尚子（赤間）合原清文（同）石橋真澄（玄海）板矢由紀（大島）【六年】萩原豊子（東郷）高島亮一（玄海）田中久美子（同）荒川謙二（赤間）川崎善彦（津屋崎）

中学生の部

特選

一年　塩屋佳奈子（津屋崎中）
二年　荒川貴美子（城山中）
三年　村山　文子（福間中）

準特

一年　浜　英明（津中）
　　　蒋田　千鶴（福中）
二年　前田りつ子（香椎）
三年　谷口　美鈴（中央中）

金賞

一年　中村恭子（福中）川崎宗史（津中）西村小百合（中央中）
二年　小川とよみ（中央中）藤井美由紀（福中）
三年　石松政幸（城山中）橋本雅子（津中）

本年度宗像大社
氏子総代評議員会

新緑の深まった去る七月十一日（木）午前十一時から当大社斎館に於て、昭和四十九年度の夏祭を前にした当大社氏子総代評議員会を開催。大祓式・夏越祭・夏季大祭・神賑行事・昭和四十八年度氏子会々費決算報告・人形献納袋配布並取まとめ等について、くまなく検討審議がなされた。

立石氏子会長の挨拶に続き、宇都宮祢宜が当面の社務状況を述べ、また氏子会幹事について説明があった。〔幹事長養父守祢宜、幹事升谷勝良権祢宜、同末安大孝権祢宜（新任）、同神島定権祢宜（新任）の旨紹介〕

その後、本日の議題に入り、先に（五月八日）行われた会計監査報告が、黒石雅資監査委員からあり承認された。

その他、前述の議題全てが了承もしくは承認されたが、終始、前進的活溌な意見の交換があり有意義であった。

論説
十字架への道
—ある米人宣教師の死—

去る六月二十四日の新聞地方版は、溺れる日本人女性を救うために玄海灘の荒波よせる海に飛び込み、娘は助けたが自分は精魂尽きて死んだ若き米人宣教師の尊い犠牲を報じていた。越えて同二十六日、この事件関係の記事が再び載って、愛児の死の連絡をうけた米国の両親からの便りがそれで、深い感銘を受けた読者は筆者一人ではあるまい。

十字架への道、キリストの教えを布教するだけでなく、自ら実践して尊い殉教者となった青年の名はフエリオ・ウエイン・リン、新教系のクリスチャンズ・イン・アクションという宣教師養成学校の出身で、昨年十二月福岡に来住し名島の千早マンションに仲間の宣教師三人と生活、布教活動に熱心な二十七才の独身〃活動するキリスト教徒〃の名に背かぬ活動家であり実践者であった。

このプロテスタントとしての誇り高き殉教事件の起った場所は、金印出土と蒙古襲来との歴史で有名な志賀島の勝馬海水浴場である。彼を呑んだ荒磯は、名にし負う玄洋に面し、万葉の古歌にも秀いで神話の神秘性も残された海岸であった。

愛児の悲報に対する両親の返事は「すばらしい死だ。息子が持っていた聖書だけを送り返して下されば結構です」とあった。この短い言葉は、春秋に富む身をそのまま十字架への道に捧げて悔いない青年宣教師が、天国から語っている心境とも受け取れる。プロテスタントの親子、この親にしてこの子あり、この子なればこの親を持つの感嘆を禁じ得ない。

新聞記事は、彼が住んでいたマンションの家主の言葉を載せていた。「アメリカ人の仲間達の彼の死に対する受け止め方は感心した。日本人は、まず死を悲しむのに、彼等は娘さんが助かったことを一番喜んでいる。彼の亡きガラは問題でなく、身をもってキリストの教えを実践したことを誇りにしている。むしろ、取り巻く日本人の方がオドオドして泣いている。おとなしかったが、温かみのある人だった」と。

勿論、両親はもとより仲間達が悲しまないわけがない。その悲しみを押し殺して、義務についてのみ語る仲間、家主が付け加えた日本人としての反省の一言「今の日本人には、こんな反応は起るだろうか」が、強く心を打つ。

何ら縁もゆかりもない他人でも、その危急を見過されないのが、人間自然に備わる心の動きである。日本人の場合でも、水泳に自信がなく救助は覚束ないと直感しても、我を忘れて難に走る。仏教の信仰者であれ、神道の信奉者であれ、いな、どんな信仰の片鱗さえ無縁の者であれ、人間本然の心が拱手傍観を許さない。

ところが、そうでない。昨今の世相は、マンションの家主が言うように、こんな反応は起るだろうかとの疑問を抱かせる。

老人が駅の通路に倒れても知らぬ振り、交通事故で少年が負傷しても救護せず傍観、それどころか、駅のロッカーに嬰児を投げ込み、実子を自動車にひかせて補償金を稼ぐ。義務感の忘却、権利の主張、訴訟の激増などなど、悪病流行の日本列島には義理人情に厚かった日本民族は不在、エコノミック・アニマルの集団が横行するかとさえ目に写る。

それは少数であろう。道義日本は健在にちがいない。わが民族の精神史は、多くの義民・烈士・節婦・貞女の功徳を伝え、今も国民多数が演劇小説に現われる言動に共感を呼んでいる。物質的繁栄の都市の一部に、闘争好みの権利主義人民や破廉恥族が、前述の利己非情を演じて、それが国民多数の堕落低劣化の如く識者に観察されて、過度の憂慮を招いているとするなら、安堵してよいだろう。

農村と非都会地のいわゆる田舎には、相互扶助の連帯意識、私利超越の敬愛感情は滅びていない。ある教育向上を説く識者は「良い苗は田舎に育つ」と、純朴の風土に成長する青年に、信頼と期待をかけている。華美な流行、節度なき浪費への道は、はっきり見えなくとも、理想実現への道がかすんではならない。それは十字架への道の尊厳にも連なるのである。

☆　☆　☆　☆

阿蒙少言

牛豚魚鳥を殺して、毎日喜んで食っている人間が、動物愛護の精神とかを盛りこんだ動物保護法を制定した。四月から施行されたお蔭で、東京の上野動物園では、長い間子供たちを楽しませた名物おサル電車が廃止になった。廃止の要望に対して、存続論も出て論議を呼んだ様子〇猿に電車を運転させることは、動物虐待と言う動物保護団体、その首唱者等はカツもテキもカシワも食べない人かも知れない。殺生禁断の戒律を守る禅僧か〇公営賭博の競馬には、無論反対であろう。電車の猿は尻を敲かれることはないが、競馬のゴール近くで騎手の鞭が鳴るのを見る。猿は野生動物だから使役として扱わないことを精神とする動物保護法に反し、家畜の牛馬は労役に使ったり、勝つために鞭で打ったりしても差支えないことは、理屈ずきの先生連が適当に説明するだろうが、人語のわかる動物が居るとしたら一斉に大声で笑うやも知れぬ〇家畜と称する動物も、元来は野生で、使役として扱いたいから飼い馴らしたわけで、保護法の精神に反しない論理は容易でない〇電車の運転はやめさせても、野に放って自由にしてやるのではなく、檻住いの見せもの、見物客のうるさいのを喜ぶ猿もあるまい。愛護の精神にかなう優遇と評して、保護団体が安心するなら結構。籠の鳥も檻の猿も、そこに居て安全、放たれて自由にされたら、強い動物に食われる危険がある〇造物主は、牛や鶏の仲間に、人間に保護され餌を貰うお礼に、乳を搾らせ卵を出せと命じてはいない。乳は仔牛の食糧、卵は種族繁殖の生産、それを人間の当然の権利のように取り上げ、後には親も屠殺して食う〇保護法は施行されても、虐待殺生は絶えない。人間界の博愛平和の論議も終局はない。神仏は何も語らない。

（白雲）

暑中御見舞申し上げます

APOLLO
出光

福岡市中央区大名2丁目8番26号
出光興産株式会社福岡支店
支店長　鶴　常　敏

北九州市門司区綿町3番7号
出光興産株式会社門司支店
支店長　村　上　義　明

宗像の山笠

神湊 大島 で皆んながワッショイ

ソーレ!!ワッショイ〜と熱さを吹っとばす様な元気のいい掛声で山笠が露路を駆け巡り、夏休み中の子供等を大いに喜ばせていた。

これは山笠で有名な博多のことではなく、宗像の神湊と大島でのこと。

何れも三年前に復活されたもので、海の男と宗像っ子の意気が素朴な中に力強く脈打っていた。

大島の山笠

去る七月十三日、中津宮末社、須賀神社の祇園祭が執行され、この神賑行事として追山が行われた。

この日はあいにくの雨であったが、中村村長始め関係者一同はハッピ姿で祭典に参列したあと、元気に山笠へ。

大漁旗や色とりどりの吹流しで飾られた山笠は漁村大島を息わせる特徴あるもので、村民の海上安全、大漁を祈念する心がそのまま表われていた。

青壮年グループの周りにかつがれた二台の山笠は雨の中にソーレ！ワッショイワッショイと勢い良く走り出す。

あちこちで力水が掛けられ、更に勢いを得た山笠が勇む。

子供等も大喜びで掛声をかけながら一諸にずぶ濡れで走り回わる。

こうして全島挙げての祇園祭は午後二時頃、海の男の力強さと、島民の熱気の中に終了した。

神湊の山笠

神湊の山笠は復活後、恒例となった去る七月二十日から二十五日までの六日間に亘って行われた。

この山笠は同区の青少年育成の一端として絶えて久しかった神湊追山を復活したもので、子供等に皆んなで心を合せる事を教え、親子共々に参加し思いきり楽しませることがねらい。

その効果は着実に上がり、地区民の熱意も急上昇。今年は津屋崎の人形師に依頼して飾付もなし、見事な山笠が出来上がった。

山笠を見た子供等は大喜びで大はりきり。

子供等が引っぱり、青壮年が担ぎ、老人が木遣歌（神湊の昔からの山笠歌）を唱い、女性が力水を掛けるといった具合で正に地区民総参加。

期間中、朝から〝ワッショイ〜〟と黄色い声と太い声が街中にこだまし、地区民は暑さを忘れ、祭り気分を満喫していた。

祭りの神髄まで見事に復活させた宗像っ子の意気と云えよう。

（写真は神湊の山笠）

宗像大社で雅楽講習会開く

去る七月十から五日間、日本雅楽会理事秋山孝行氏を講師として招き、祭祀音楽としての雅楽の講習会を開催した。

当社職員はもとより、筥崎宮、太宰府天満宮からも数名の神職が練習に参加し、大社境内には終日美くしい音色が響きわたり、行きかう参拝者が足を止め、雅楽を聞き入る姿も見られた。

当社に於ては常々雅楽及び神楽に力を注いでおり、春秋の大祭には氏子青年会や女子生徒より風俗舞、浦安舞等の奉納舞がある。

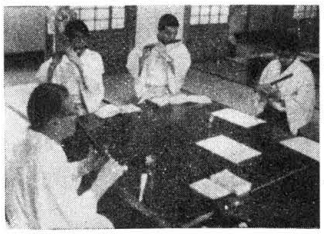
特に風俗舞は昭和三年、今上陛下御即位の大礼の折、福岡県が主基地方の御治定の光栄に浴し、その際に主基地方風俗舞歌舞として、大嘗祭大饗宴に於て行なわれた舞で、現在では当大社にだけ伝承保存されている。

氏子自身が神の心を和げ、慰めそして祭祀に参加する唯一の方法が、この雅楽であり、神楽なのである。

我々神明奉仕する者として、その氏子青年に心技を指導しなければならない立場にあり、又直接奏楽にたずさわる奉仕者として、今日迄諸先輩が築きあげてきた日本芸能、古典宗教音楽を後世に伝授する為には益々努力を重ね技術を磨かねばならない。

この講習会は今後三年間は続ける方針である。

（写真は講習会もよう）



大社からパトカーを贈る

去る七月八日、当社は宗像警察署にパトカー一台を寄贈した。

これまでに当社から二台贈ったが、数年前に贈ったパトカーはすでに性能が落ちたため、浄財の一部で新たに三号車（コロナ一六〇〇cc）を購入し贈ることとなった。

八日午前十時、まず当社で〝おはらい〟をすましたあと午後四時より宗像署で贈呈式が行われた。

宗像郡は交通量の非常に多い国道三号線を控え、また日の里、森林都市等の団地が出来て人口が急増しているが、その交通の取締りと指導及びパトロールによる防犯の強化等が期待されている。

（写真は贈呈したパトカー）

しゃもじわたし

行き過ぎたら、引き返す。やりすぎたら、反省する。人間の常識が、正反合の論理方式の難しい解釈をあてはめるまでもなく、行きつ戻りつの内に、よろしく落着させるのである。その常識は、必ずしも良識を含まない。

難しく出たが「しゃもじわたし」という明治調の長俗語を、漫筆に述べさせたいつもりである。当世の若い人たちにはなじみのない言葉。だから少々前おきをしておかなければならない。

ひと頃、よく新聞雑誌などに見えた「家つきカーつきはあぬき」の嫁入宣言は、近頃影をひそめた。昭和元禄が昭和物価に押されて、姿をひそめた感と似ているかも知れぬ。それは姑が居る方が部合がよいと、若い女性の新家庭構想が変ってきたからである。

近代産業の産物たるアパート暮しに、ばばあぬきな満足かというと、あきたらない、新しい要求が頭をもたげてくる。狭い庭でもあるマイホームに住みたい。コンクリートの壁まで壁を抜だしたい、でも若い者には収入が少く、建築資金とてやすやすと貯るものではない。夢につづ夢とたれば、現実化は非観的。

姑の居る家、そこに同居が、適齢期の頭を切りかえさせる。昔のようには威張らず嫁の意見に従う姑に、時代が大低教育を普及し、あきらめの訓練も行き届いている。家事も手伝ってくれる。子供が出きればお守りもする。会社勤めもやめずに夫婦共稼ぎ、金も自由になる。

しゃもじわたし、へそくりも貯まり、パートタイムだって可能。休日の行楽や買物に留守番によい。

こう計算すると、（はばあぬきでなんて、もう古い。結婚相手にカーつき同様に姑があれば、なお好都合と手を打つことになる。時代の変化は、老人の見方をしろいろに変えさせるのである。

今頃の適齢期や若い妻は「しゃもじわたし」と聞いても、何の意味か判るまい。この民俗語はもう過去の遺物、通用もしないから意味も判らないのが当然。これが数十年前までは厳然と社会に家庭に、長い生命を持っていたのである。戸主が家長として家族を支配した頃といっても、そんなに遠いことではなく、三十年前の終戦までは、家長の妻の座は主婦権の保持者として確立されていた。

鹿児島しく法律語の調子で「しゃもじわたし」なる前時代的民俗語を解説すれば、嫁に対して姑が主婦権を譲渡することである。都会の若い主婦に、この民俗語とその背景としての社会慣習を説明して聞かせるなら、骨董品の説明でも聞くような興味を感ずるであろう。笑いながら「随分封建的な言葉が、近頃まで呼吸していたこと」と、感想も洩らすかも知れない。そうなれば漫画である。

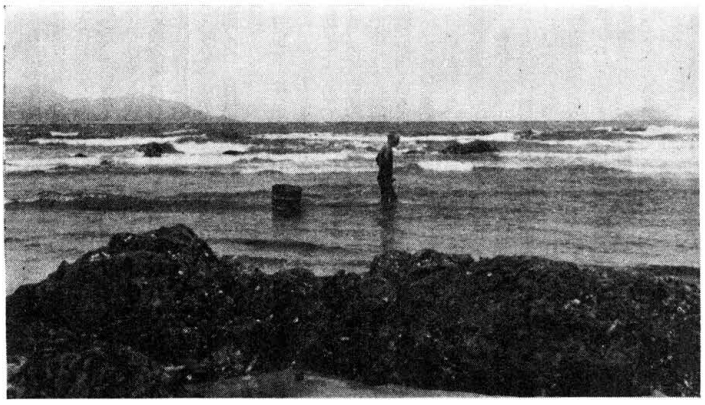
戦後既に三十年の歩みは、旧習の残り易い農漁村まで、民主化の風が吹き渡り婦権確立の気運が響き渡って、地域社会の習俗も家庭の伝承も、洗い変えてしまった。多くの美しいもの愛すべきものが姿を没し、その名もまた言葉の生活から消えた。

主婦権をしゃもじで表現してきた習俗は、ほほえましい。何のことはない台所の一つの道具だが、三度の食事に活躍する。食生活に重い任務と責任がしゃもじにあり、総元締の位置におかれた家族の飯盛りの主役。これを握るものが主婦権を握る。野生的だが素朴な好い表現、妙味がある。

しゃもじわたしは、処により杓子渡しと云い、またへら渡しとも云う。「方言はくに（郷里）の手形」とする俗諺もある。方言は何だか野卑なものとの考えは誤り。素朴な田舎の民情が生きている。江戸弁、東京弁が上品な言葉なのと同様に、

宗像の夏

澄みきった空、紺碧の海、豊かな緑を求めて人々が宗像にやってきた。



夏になると公害もなく、大腸菌もいない青々とした海を求めて、豊かな自然を求めて、人々は宗像に殺到する。
海辺は色とりどりの水着で華やかに色どられる。
奇声が上がる、水飛沫が上がる、歓声がこだまする。
様々の船が、入りみだれて浮かぶ。
海辺は一大楽天地と化す。ある朝、同じ海を一人の海人（あま）が歩いていた。腰に桶を引きながら…。荒られた海に櫂を求めて…。海人の手からビンが、缶が、舞上がり、虚しい音を残し岸に転がる。　そこは海人の厳しい戦場なのだ。

話題の新車をみる（六）
いすゞ一一七クーペXEの巻

自動車業界にとって、このところガソリン代の値上がりの外、四月からの取得税の引上げに続き、五月からは重量税が倍（但し一トン未満車）となる等、国内に於て条件はかなり厳しいものがある。
扨て、クルマを選ぶ際ポイントとなる点は、スタイル・性能・居住性・燃費等のトータルバランスを考慮することは言うまでもないが今回は、その中特にスタイルが秀れ、ヨーロピアン感覚の車一いすゞ一一七クーペXEの新設オートマチックを紹介したい。
ギヤ・デザインの流麗なクーペは、国際的な視野に立ってみても数少ない美しいクルマである。兄弟分に当るイタリア車フィアットのディノ二四〇〇クーペと比べても遜色はない。
この車のデビューは一九六六年のジュネーブ・ショーで、七三年にはマイナーチェンジをもたらす一八〇〇ccに発展。
このオートマチックはXCやXTと同様にアイシン・ワーナー製の三スピード6ポジション、フロア・セレクター方式であり、センターコンソール上のATシフトはスタイリッシュでポジション・ストローク共に優れている。
一方、DOHCをよく理解して真にカムに乗って走らせることを好む本格派には、このXEとATのマッチングは特にうってつけである。市街地での走行にも中低速からのレスポンスも優れている。

特長ある装置の一つにあげられるものに、"ECGI"がある。これは「いすゞ」が長期間にわたって開発を進めてきた電子制御燃料噴射装置で、理想的な燃焼を可能にしてロスの少ないため実用性と高性能を両立させている。
総排気量一八一七ccの直列四筒は一四〇PS／六四〇〇rpm、一七Kg・m／五〇〇〇rpmの動力性能を発揮する。
ブレーキは前ディスク、後はリーディング・トレーリングのドラム、サーボアシスト付きで効きは良い。スチアリング・ギヤ比は、一度変更されたがPA九五系はバリアブルレシオに改めた。
またハンドリングはアンダーも軽くなっており、タイヤはBSのワイド七八一三一四PRが履かされており、方向安定性に不足はない。
その他の主要諸元として、全長四三一〇・全幅一六〇〇・全高一三一〇・重量重量一二二五。

海岸清掃奉仕のあと
田島老人クラブが参拝

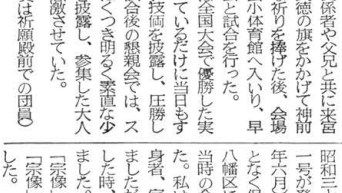
去る七月一日、田島地区老人クラブの一行約八十名が参拝された。
一行は、地元総代と共に月祭に高宮祭より参列し、祭典後清明殿で茶菓子による和やかな直会に一刻を過した。
同クラブの会員は、いずれも老人大学に於ける優秀な生徒？であり、常日頃大学の研修等で当社にも、馴染み深い方々はかりである。今回の参拝は、早朝より神湊海岸の清掃奉仕に引き続き、徒歩に依る神社参拝であった。したがって他地区から参加するクラブ員も、出来るだけ乗物を利用しないよう指示がなされていた。
今日都会に於いては、老人の暗いニュースや、若者との断絶等が伝えられる事が多い中で、同クラブ会員は、老人大学に於て計画的に豊かな人生経験を生かし、充実した生活を創り出すことを目標として活溌な活動を行っている。因みに同大学の本年度学習計画をみると、五月開校に始まり、七月健康管理と生活設計、九月少年自然の家現地見学、十月玄海町の文化財美地見学、十二月郷土の歴史と民話、一月日本経済と物価等や神社参拝等が組まれている。直会の席上は、年を忘れた賑やかな親睦の場であった。

生産地形成めざす
＝玄海町農協に盆栽部会＝

時代とともに失われつつある自然。反面では暮らしにうるおいや心にやすらぎを求める気持ちが日に目に高まっている。このような緑化気運に即応する緑化産業は現代の成長産業の一つと数えられている。
玄海町農業協同組合（深田稔組合長）では本年新に盆栽部会を発足させ、その初総会が去る七月一日、江口部落石松寛氏の私宅で開催され百名をこす部会員を数えた。
この盆栽部会は、盆栽並に植木苗木の生産について農協と緊密な連携を保ち、生産技術の向上と規模拡大を計り、盆栽及び植木苗木の生産地形成の基盤を確立し流通過程の計画化を推進し所得の増大により部会員の社会的経済的地位を高めることを目的とし、その事業は
1、養盆管理技術の研修
2、植木、苗木の生産繁殖及管理に対する研究並びに講習
3、生産に関する優良種苗、農薬の斡旋並びに諸施設並資材の共同購入
4、生産品の農協一元化販売の実施
5、その他部会目的達成に必要な事業となっている。
宗像大社を中心にした宗像郡玄海町は孔大寺、湯川の四塚連山の主峰をあおぎ、玄海灘に面した大部分は丘陵状をなし、鐘崎から神湊に至る海岸は美しい松原が延々と続いている。又対馬暖流の影響を受け、寒涼しく冬暖かい温和な風土を形成している。
このような環境は松樹類の栽培に最適で、特に五月松原の中にある江口部落、池野部落では数年前よりこの松樹類を始めとした種々の盆栽作りが盛んであった。
これら江口、池野両部落を中心とした同部会の今後の活躍が期待される。

―親善試合のため来町―
大野城市から豆剣士

去る七月十一日、大野城市少年スポーツ団（剣道の部）が来宮、祈願参拝のあと、玄海少年剣道部員と親善練習試合を行った。
玄海少年剣道部（大社職員指導）と同団とはかねてから何かと交流があったが、此の度の練習試合は剣道を通して更に親善を深め、両地域の青少年育成に寄与せんものと、両部指導者間で連絡を重ねて実現したもの。
この日、同団員は指導者平川豊氏始め関係者や父兄と共に来宮団旗と武徳の旗をかかげて神前に敬虔な祈りを捧げた後、会場である玄小体育館へ入り、早速練習会と試合を行った。
同団は全国大会で優勝した実績を持っているだけに当日もすばらしい技倆を披露し、圧勝したが、試合後の懇親会では、スイカをぱくつき明るく楽直な少年ぶりを披露し、参集した大人たちを感激させていた。
（写真は祈願殿前での団員）



社告

当誌は昭和三十六年五月、月刊紙として発刊以来十数年を経ました今日迄、毎月一日の発行日でまいりましたが、宗像大社四季大祭始め諸事情を勘案しました結果、本年九月号より毎月十五日を発行日とする様変更致しましたのでお知らせ致します。

宗像大社
宗像会

【便り】

拝啓、六月のボンは時折肌寒い日が訪れ、夏が待たれる今日この頃、御地では梅雨明けも間近かあさいの花が美しいこと、存じます。
御多忙中にも拘らず本日貴重な文献（宗像神社史上・下・別巻、沖ノ島Ⅰ・Ⅱ資料冊子等）御恵送さいましたこと、心から御礼申上げます。
大学では宗像神社を中心に、歴史的観点から博多湾地方の講義をしております。私が日本に滞在して居りました時、沖ノ島等（戦時中要塞地区だった為か）参ることができず十分な資料は得られませんでしたが、只今拝受しました文献で、いろいろ不明な個所、曖昧の点が解消されること、思います。
現在執筆中の「神道神話辞典」には切論、将来学生の学位論文指導にも是非利用させていただきたく存じて居ります。
御厚意に深く感謝致します。
やもすれば皇室および神道への崇拝が忘れかけられたかのように見えましたが、それが杞憂であることをこの御送りいただきました本で証せられましたこと非常に嬉しく存じます。末筆ながら右とり急ぎ御礼まで
六月二〇日　敬白
H・ツアヘルト拝
（この便りは、先般当社から社史を送ったのに対する礼状で、氏自筆の日本語文で原文のまま）

「宗像」を読む毎に

毎月御送付下さる「宗像」を愛読していますが、神社が中心になって神社の近況をもとゝして郡内外の動向も合せ知ることの出来るのは、嬉しい限りです。
昭和三十六年一月一日「宗像」第一号が発刊され今日（昭和四十九年六月）まで私は一枚も欠かすことなく保管しています。
八幡区に八幡宗像会がありますが当時の会長は、故安永渡平様でした。私は八幡製鉄所社員で宗像出身者、宗像会員のお世話をしていましたが、（宗像）第一号を手にした時、宗像人としての誇を感じました。それからは、会社でこの「宗像」を掛員に必ず供覧し勿論「宗像」は事務所に保管していました。
話は変りますが、八幡製鉄所には「うろかね」と言う機関紙を毎月一日と十五日に発行していましたが、私は昭和二十年の終戦当時から昭和四十二年まで一枚も欠かすことなく保管していました。
この機関紙が業務上非常に役立ち事務所でもよく色々のことで借りに来ていました。
八幡製鉄社員の中で、二十年からの保管者が三人居ましたが、私はその中の一人でした。
当時の会長は、故安永渡平様でした。私は八幡製鉄所社員で宗像出身者、宗像会員のお世話をしていましたが、（宗像）第一号を手にした時、宗像人としての誇を感じました。それからは、会社でこの「宗像」を掛員に必ず供覧し勿論常に役立ちよい勉強になりました。常に感謝しております。
宗像町城南ケ丘　野中　要一

宗像史蹟（十）
安倍宗任と大島安昌院墓所

玄海町大島には前九年の役の賊将で驍勇の誉高かった安倍宗任が配流された。（貝原益軒によれば讃岐国に流罪となった。その当時頼義は前九年の役の軍功で正四位下豫州であったが、陸奥に逃亡の賊（うれ）いもあるので、さらに西に移し、大島の小浦の佐矢島に流し、大宰府庁が厳重に監視に当ったが、ついにこの地で逝去した。その墓が安昌院である。
佐矢島は本村の東北の小大浦の磯際の岩の上に社があって、里人は道祖（さへ）の神といっている。宗任が大島に流されて後、陸奥国から松島明神を迎えて祀ったと伝えている。よってこの島に残った安倍氏の子孫はすべて生まれて忌明（いみあけ）には、まずこの社に参り、その後大島の中津宮に参詣したといわれているが、中津宮の末社ではない。
宗任には三人の子があって長子は松浦に行き、後世松浦党の祖となり、次子は薩摩に下り、三子が大島にとどまり、島の三郎李任と称した。宗任が大島で最初に居住したところを邑沙蔵（びしゃくら）といって、宗任が安置した郎門堂があったから名づけたもので、現今は民家の近くに移したという。宗任も後には御所山に居住をえている。ここは佐矢島の西方にあって、その麓は広い平地に島があって、小山で四方が囲まれ、防風に適当な地であった。大島に残る安倍氏の遺孫はこの島を耕作して生計を営み、又宗任が配流になった時、随伴した家臣の屋形、萬田、山形島の浮囚の長貴原氏則の来援によって、貞任軍の最後の拠点府川（くりやがわ）柵（盛岡市郊外）も陥落して、貞任は死し、その子弟は皆誅せられたが、宗任と家任は降伏したので、四（とらわ）れの身となって伊豫（い

頼義の在任中は無事であったが任期終了の年になると貞任が婚姻のもつれから不満を起したことが頼義の怒りとなって、父頼時も叛した。天喜五年（一〇五七年）頼時は流矢に故死したが、宗任は兄貞任と力を協せて大戦したので、頼義も長子義家の来援を大いに力を加え、奮戦したが、苦戦に苦戦を重ねる戦況であった。このようにただ年月を重ね容易に鎮定ができなかったが、出羽国（秋田県）の豪族清原氏則の来援によって、貞任軍の最後の拠点府川（くりやがわ）柵（盛岡市郊外）も陥落して、貞任は死し、その子弟は皆誅せられたが、宗任と家任は降伏したので、四（とらわ）れの身となって伊豫（い

久留米工業学園
短期大学助教授
田中政喜

宗像大社歌会 俳句作品集（一三九）

田熊　安部　ゆき
躍りあがりたる神苑の樟若葉

津屋崎　菱　花　女
びわの枝押し曲げてもぐ患者達

津屋崎　井浦　良介
髪洗う妻の背に降る五月雨

東京　小浦　太平
農を守り蛍を守りて老いけらし

土穴　八尋　恒夫
春雨にぬれて飛びいる燕かな

藤沢市　玄　洋　子
風鈴（スズ）の音のはたと停まれり夏の暮れ

宗像　安部　光洋
そびえ立つ岩肌の裾竹の秋

東郷　有吉　春子
駈け抜くる担ぎ山笠怒声飛ぶ

福岡　入江　柳江
お留守がち蝶の宿なりもちの花

大井　安部　重郎
無造作に机一脚夏座敷

田熊　力丸　一郎
金婚に夢あらたなり孫の数

宗像　岡田　無名
樽御輿かつぐ子供等夏祭り

沖ノ島紀行

九州大谷短大教授　中村行利

はじめに

筑紫路　昭43　土屋文明

筑紫路に未だ詣でぬ宗像の中津宮奥津宮何時か詣でむ

神湊（こうのみなと）に沖の白波ふりさけて見れども見えず奥津宮遠し

韓国（からくに）と海の路なる宗像宮神々人々行きかへりけむ

海一重遠く近ければ憎しみあい親しみあひて久し韓国

右のうたについて地もとの者として私にもぜひ「質疑」に参加してほしいと「西三河アララギ通信」からの依頼を受けたが、忙しさにかまけた私は大日本地名辞書を中心におざなりの解説しかできなかった。その後友人の好意で沖ノ島に行けることになったので、それを機会に小倉図書館に通って宗像郡誌をはじめ幾つかの文献をあさってみた。なかでも「海の正倉院沖ノ島」（毎日新聞社）は特に有益であった。

昭和二十七年以来数度にわたる考古学者を中心とする調査団による結果をまとめたもので、前半に写真、後半に解説をした大冊豪華版である。それ以前に発掘報告書が幾冊が出ているのでこの「沖ノ島」はそれらの要約であり決定版といってよかろう。その事業は宗像神社復興期成会の発起であって、会長出光佐三氏の物心両面からなるご尽力に負うところが大きいとのことである。

沖の島を海の正倉院として日本中にデビューさせたまさに画期的な大事実である。今その結果をかいつまんでみるとおよそつぎの如くなろうか。

国宝や重文など無数の宝物は縄文時代から奈良時代にかけてのものであって、それらは皆沖ノ島の神にささげられたものである。

古代日本と大陸を結ぶ動脈の真中に三社があるので大和朝廷の勅祭場となったものと見える。その直接の司祭者としての地位が宗像氏に与えられたものであろう。

遺物に幾内系・大陸系の多いことからそれが推測される。祭祀は岩上・岩蔭・半岩蔭露天・露天の順に四段階に経過したもので呪術的性格から日常的性格に移っている。（祭祀は神殿のない時代に巨岩または樹木を依代（よりしろ）として、神の降臨をねがい、国家の大事についての祈願をしたものであろう）

島は二億年から七千万年の間にできたもので大部分は粘板岩であって、他は新しく噴出した石英玢岩である。

植物は七十二科、百八十種に及ぶ。ビロウとオオタニワタリの北限地である。

動物はオオミズナギドリ・オキノシマネズミ・クマネズミ等多数である。およそ右の如くである。

それから沖津嶋防人（おきつしまさきもり）日記（青柳種磨著）にはかねてから心ひかれていたが小倉の図書館にはないというので福岡の県立図書館で見せて貰った。

種磨は種信の若いころの名であるが彼は自らの奥津島の防人になぞられて百日間神に仕えたが日記はその時のものである。

日記には長歌数首、短歌数首が載せられているが私の驚いたのはその大方が万葉調であることである。私は万葉集以後の数少ない万葉調歌人の一人がわが郷土に居られたのに気づかなかったことを恥ずかしく思うと共に、それを知り得たことを喜んでいる。

沖ノ島紀行

七月十二日、曇、風やや強い、船室から甲板に上ってみると沖ノ島は目の前にあった。

原生林の緑におおわれた島の左下には粘板岩の断層がうすぐらく、右上には大きな石英玢岩が白く並び立っていて、その左はしには燈台が霧の中にほのかに見える。島の手前にはテトラポットで大きくかこまれた港があるが、それは運輸省の避難港を兼ねたもので百隻の船が収容できるという。最初のテトラポットは浪にさらわれたので現在のは二度目のものであるがそれでもまだ重さが足りないので、更に重いものにやり直すという。そのことからもこのあたりの玄海の浪の荒さが想像されよう。

この島は明るい中にも古めかしく神々しくてしかも近代的な港とも決して不調和ではない。港の近くには天狗岩・御門柱・小屋島といった岩礁があるが沖ノ島は島全体がご神体であるから御門柱もそれにちなんだ呼び名であろう。

島に上った者は先ずみそぎをするのがおきてになっているので、私は港の奥の岸壁にあるプレハブの社務所にむかった。

磯にはツルナ・オニヤブマオ・ハマギクなどが茂っていた。社務所には儀典課長の太田氏と月刊「宗像」編集長の末安氏とが居られたのでしばらくお話しした。その時私は種磨の防人日記にある。

老人の若ゆとふ水ぞ沖津嶋ありその岩井いさ結てな

目かゝやくこかね花さく岩の間ゆいつる走井飲はしよしも

走井（はしりい）の水底さへに照までに五百箇いはむらにくかねかゝよふ

という歌の岩井すなはち走井の位置についておたずねしたが、それは先年の豪雨のときの山崩えでつぶれてしまったとのことである。

私は末安氏の案内で社務所のすぐそばの港の潮に入って氏とともにみそぎをした。奥津宮に向って礼拝してから磯のタンクの水で体をすすいだが、この水はつぶれた岩井のかたわらの粘板岩の断層から湧き出ているとのことであった。

ふと見ると大きなネズミが石垣の中にかくれて行った。磯にいること、体の大きいことなどからクマネズミに間違いあるまい。

（つづく）

二宮佐天荘主人 四島一二三伝

―原田種夫著―

第二十三章 大東亜戦争に突入

昭和十六年は日本にとって運命の年であった。この年から二十年の八月十六日の終戦まで暗澹とした時代がつづく。この年の五月の新緑の候、四島氏の長女和子さんが榎本重彦氏（もと常務取締役、現顧問、現日米コカコーラボトリング株式会社常務取締役）と博多ホテルで結婚式をあげた。四島氏は、地位のある人に頼んでの形式だけの媒酌ということには、つねに批判的だったから社の外勤、高木憲治氏夫妻に、媒酌をたのんでの挙式であった。和子さんは筑紫高女を出てから女子大学へ進学したいと思ったが、氏はそれよりも早く結婚したがよいという意見なので、当時福岡市内で花嫁学校として有名だった伴先生の学校に通ったのであった。はじめて娘を嫁がせるので氏夫妻の喜びは大へんなもので、和子さんの晴衣裳は奥さんまかせにできず、氏は松屋デパート（当時）に直接いって、何組も自分で選んだという。花嫁道具も、いちいち四島氏が吟味して、調達したということで、いかに氏の喜びようが大きかったかがうかがわれる。

和子さんの話では、花嫁道具の中に、大きく頑丈な本箱をそえてくれたのが、強く印象に残っているという。無駄使いには、やかましかった氏も、本となると、いつも無制限に買ってくれた。いつまでも本を読むことを、忘れないで……という、何よりの、和子さんへの思いやりだったにちがいない。この本箱は今も立派に役立って、成人した孫たちに利用されているということだ。戦時中ではあったが、立派な結婚式であった。社の人たちも招かれて、この結婚を祝った。

四島氏は、明治十四年十月十四日の生れだから、この年は還暦であった。いま、氏の家の門を入って左側に、ライオン像と日蓮さんの像がおいてある。このライオン像と日蓮さんの像は、氏の還暦の祝いに、二人の友人から贈られたものであった。元寇の国難に当って、身をもって国難に当ろうと誓われた日蓮上人の信念の強靭さに氏は日ごろから頭を下げていたのである。獅子は王者の風格をもっているのでつねから氏は好きであって、「獅子の宣言」というのを作って自戒の言葉としていたくらいであった。いま、獅子の像の右に「獅子の宣言」の立て札が立ち四条からなる宣言がかいてある。この宣言（一七七頁）は、まことによく氏の思想と行動をいい表わしたもので、氏としても、自分の信条のうちで、一ばん好きな言葉ということだ。多くの人も良い宣言だとほめている。氏の室にもこの宣言が大きな額におさめられている。日和見主義、あるいは傍観的な冷笑的な態度を峻烈に拒否し積極主義の獅子の四島でありたいという氏の念願である。これとともに、前にかいた「力の泉」という格言こそ、氏が事あるごとに自分に話しかける言葉であろう。人間で一ばん大切なものは信念であり、信念が力の泉だというのが氏の信条なのだ。それとともに、福沢諭吉先生の訓えも氏の生活の指針の一つであった。

福沢諭吉先生訓

一、世の中で一番楽しくて立派なことは一生涯を貫く仕事をもつことである。

二、世の中で一番淋しいことはする仕事のないことである。

三、世の中で一番みにくいことは他人の生活をうらやむことである。

四、世の中で一番尊いことは人のために奉仕して決して恩にきせないことである。

五、世の中で一番美しいことはすべてのものに愛情をもつことである。

六、世の中で一番悲しいことは嘘をつくことである。

七、独立の気力なきものは国を思うこと親切ならず。

八、卑屈の民は真の愛国者たりえない。

昭和十六年には、長女和子さんのお嫁入りがあり、社長は還暦を迎えるなど四島家にとっては目出たい年だった。だが一方では、この四月一日から東京、大阪などの主要六大都市で米穀通帳制が実施され食糧事情がだんだんいけなくなっていった。それにしても、この窮屈な時代に七月十日、関門鉄道トンネルが貫通したのはやはり世紀の偉業であり壮観といってもよい。六月一日から単線運転、十九年九月九日に複線が開通した。上り三、六〇五メートル、下り三、六一四メートル、工費三、九二八万円、延作業人員、三四七万人という数字が上がっている。前年の七月七日の禁止令からいわれ出した「贅沢は敵だ」という言葉が合言葉となって、国民は緊縮生活を強いられ、どこでも「足らん、足らん」という言葉が挨拶になった。十一月には横文字追放で「バット」を「金鵄」と改め、「チェリー」改め「さくら」となり、野球用語も、すべて日本語になってしまった。

こうして、いよいよ、十二月八日の未明、わが帝国海軍が西太平洋で米英軍と戦端をひらいたことを知った。内容がよくわからぬ事態の緊迫に直面して重苦しい緊張と不安の連続にやり切れぬ思いをした国民は、日本が英米と戦争をはじめたことをどういう気持で受けとったか知らない。「軍艦マーチ」の伴奏つきで放送される緒戦の大戦果の発表に国民は有頂天になった。しかし、そういう有頂点の喜びも長くつづかないことになっていった。それをくわしく書くことは本稿の目的でもなく、また敗戦にいたる惨敗のことをくわしく書くのは愉快ではない。そこで、敗戦の日までの推移をかいつまんで書いておきたい。その戦争の推移が同時に会社の苦悶となり、また発展のきっかけとなるのだから、ぜんぜん筆を省くというわけにいかないのである。

昭和十七年に入ると戦争の激化につれて農業生産力がひどく低下して国民飢餓の時代になって来た。芋が主食となり、配給米は二分ツキ米となり、外米、コーリャン、トウモロコシ、おし麦がまじった。みんな目の色を変えて、米やカボチャや、馬鈴薯を買いあさった。経済警察の目が飢えた国民の尖った肩に光った。四月十八日に東京、名古屋、神戸に米機が初空襲をし、六月にミッドウエー海戦がはじまったが、これが敗戦の序曲となった。十八年になると、二月九日、ガダルカナルの日本軍の転進を大本営が発表、転進、じつは撤退だった。この日、スターリングラードの独軍が降伏した。戦局はきわめて不利に展開していき、「退却」という言葉が「転進」という言葉で表現された。わが方は制空、制海権をうばわれ、南太平洋およびニューギニア方面で後退をつづけ、四月には、山本五十六連合艦隊司令長官が搭乗機を撃墜されて戦死した。

十九年の二月二十六日、クエゼリン・ルオットで日本軍四千五百人が「玉砕」した。いつも赫々たる戦果を期待した国民にとって大きいショックだった。「玉砕」は全滅であり、「転進」は「退却」のことだ。国民は大本営発表に不信の念を抱きはじめた。

「ほしがりません、勝つまでは」と戦争に協力しようとしても、だご汁や、馬鈴薯に塩をつけて命をつなぐ生活では栄養失調となり体力が衰えていくのでどうにもならなかった。「世の中は星に碇に闇に顔、バカ者のみが行列に立つ」という狂歌が流行した。厭戦の気分が霧のようにただよっていた。

このように事態が切迫し敗戦の色濃いい昭和十九年に福岡無尽株式会社は、創立二十周年を迎えた。現専務取締役の豊福安雄氏が取締役に、また、後に常務取締役として活躍した榎本重彦氏が二月に入行、四月に監査役になった。若い社員は出征または徴用で人手不足であり、無尽会社の統合のことで上からの重圧があり、創立四十年の間にこの昭和十七年から二十年にかけてが一ばん苦難の時代といえよう。福岡で発行している月刊誌「うわさ」社長の寺田氏もその時代には紙不足で出版はできず、福岡無尽に入社して働いていたのであった。その時代には本が手に入らなかったが、四島氏がほしいという本は、すべて寺田氏がひきうけて集めたのである。四島氏は、本の虫のように、読みふけり、入手が困難な時期であったが、本を買って持っていくと、何時でも、氏は気嫌がよく、ニコニコとしていたという。

第二十四章 断平統合を拒否する

その頃、会社は大部分の青壮年が国防にかり出され、職場は、老いた男の社員と女子社員だけで、外から応援を求めねばどうにもならなかった。無尽会社統合のため圧力が日ごとに激しくなり、社長と速水常務（当時だけでは、非常時局に抵抗するのは困難となって来た。

十九年六月十五日、米軍サイパン島に上陸、七月十七日には、サイパン島の日本軍が四二、八八七名戦死し、七月十八日、東条内閣が総辞職し、これに代って、小磯内閣が成立した。十月に米軍はレイテ島に上陸した。

福岡では、六月十六日の未明、北九州方面にはじめて敵機が来襲した。空襲は海の彼方のことでしたので、みんな愕然となった。十一月二十四日、B29八十機が東京を大空襲したのにはじまり、サイパン基地のB29は、本土来襲をくり返えし、西日本一帯の空に敵機が跳梁しだし、警報がしきりに出た。

当社が二十周年を迎えるころ、即ち、戦争が苛烈を極めていた昭和十九年、福岡県内の無尽会社は、当時残っていた小倉の西日本無尽、南筑無尽、共立無尽、九州無尽と三池無尽それと当社の六社に統合されていた。この六社はもちろん九州全部の無尽会社を野村銀行の傘下で、一社に統合しようとして協議が進み、当社を除く県内五社は統合に承諾した。こうしてぎりぎりの処に来てまで承諾を保留したのは当社だけだった。国策に協力しないというのではない。余裕資金で戦時国債をすすんで購入したり、太平洋戦争末期に貯蓄無尽の募集に尽力するなど大いに国策に協力をしているのであった。

統合される必要がないほど当社の内容が充実していて自主的にやっていける確信があったからこそ統合の承諾をしなかったのだ。その上取引先はもちろん、有力筋からも統合反対の意見があったのである。しかし、圧迫はつづき、何らかの回答を迫られた。そこで、六月二日、応召中の豊福取締役を除いて全取締役、監査役出席の下に最後的役員会がひらかれて次のことを議決した。

一、県下一社としての合併ならば同意す。

一、野村銀行の介在する合併又は譲渡ならば不賛成。

これは、最後的な会社の意思決定であった。

その当時、国家総動員法に基く「金融事業整備令」という勅令が出ていて、これによって政府は、金融機関の合併や営業の譲渡をさせる権力を駆使できたのである。昭和十三年にできた国家総動員法というのは、戦時統制法規の集大成で、労務、物資、資金、物価、施設などの経済部面をはじめ、国民生活の一切の部門を、一片の勅令で政府の統制下におくのを認める法律であった。

戦争の熾烈化と共に、戦時体制は一層強化せられ、金融機関に対する統合も弾圧に等しいものとなった。此の間、数次に亘る大蔵省、銀行検査官の来県。県当局および日銀福岡支店長の熱心な斡旋など、風雲急なるものがあった。四島氏に対する大蔵省からのきびしい出頭命令が出されたが、氏はこれに応ぜず、当時の速水常務取締役、斎藤取締役が社長にかわって出頭するなど、この間にあって非常に苦心した。